資料４

「復興に向けての山古志村の動向と想定される課題」

１．山古志村の村民及び集落等の特性―復興計画の前提として

①山古志村の生活と住民の気質について

・農業を中心とした複合的な「業（なりわい）」（ほとんどが兼業農家）

・高齢者世帯が半数近くを占める（60 歳になったら戻ってくる村民もいる）

・自然とともに生きる暮らしから、与えられた条件を受け入れる気質がある

・耕作の助け合いはあるが、共同営農や農業法人に対する関心は低い　等

②集落の動向・特性について

・14 の集落ごとの特性（世帯、職業、気質　等）

・各集落の被災状況は、軽微な被害地と甚大な被害を受けた地など様々である　等

２．復興をめぐる動向及び村の考え方

①復興（帰村）に対する村民及び集落の考え方や動きについて

・「帰れば何とかなる」という村民意識―雪がとければ帰りたい

・集団移転を考えている地区や住民がいる

・復興（帰村）に対する各集落の動向や意向（集落間の温度差）　等

・大半の人が今は村に戻り、震災前に戻ることが目標。その先の生活は考えていない　等

②復興（帰村）に対する山古志村の考え方や動き

・みんなで村に戻ろうという点は決まっているが、その他は白紙

→１１月「仮設入居村民調査」で、住宅再建場所を９割の世帯が「山古志村内」を希望

・村民の安全・安心が最優先だと考えており、それを軸に戻り方を検討中

→新聞報道の「3 ヵ所へ移転」も村の決定事項ではない　等

・１２月２５日に村内の農業従事者に営農意向調査を行った

・１月に全１４集落の住民から、住宅再建先について希望を聞き取る座談会を開催する

③復興に関する様々な動き

・県も国も山古志村からの要望やプランを待っている状態

・安全対策や基盤整備を中心に来年度の予算取りを進めている

３．復興に向けての課題について

①帰村のスケジュール・方策と基盤整備

・被害の小さい集落の帰村を先行することの是非の検討
　→安全の確保、学校や保育所等の公共施設をどうするか　等

・仮設住宅の期限である 2 年間における整備計画の検討
　→整備プログラムの優先順位、村内の道路ネットワークの確保や土地利用計画の策定　等

・安全である場所の検討
　→冬期間の調査・工事の中断　等

②住宅をはじめとする住民の生活再建

・住宅再建に対する支援のあり方の検討
　→自立再建が困難な世帯の存在、公的制度の限界や制約

・帰村までの生計手段の検討
　→仮設住宅から通村しての営農、夏期のみ帰村　等

③震災を契機とする地域産業の振興・創出

・市場性の大きい「山古志ブランド」の活用・展開
　→養鯉業、米（はさがけ米)、観光・交流　等

・帰村後に夢や希望のもてる地域経済（産業）プランの作成
　→生活やライフスタイルと一体となった働き方の提示

④復興のための制度や法制度の活用方策（今後のモデルとして）

・既存制度を最大限に活用
　→「災害復旧特区」の申請（県との連携）

・既存制度の見直し、修正を要望し活用
　→「農林水産基盤整備事業」「防災のための集団移転促進事業」「罹災者公営住宅建設等事業」等

・新しい制度の制定を求め実現